

「地図豆」の地図を広げて街歩き

52 いもり川から春の小川、十二社へ（距離約 10.5km）



春の小川碑

【街歩きの概要】

旧版地図などを広げて、渋谷川の支流いもり川を上流へと向かい、渋谷を経て宇田川、そして河骨川（春の小川）へと川跡をふらふらとどこまでも歩く。最後は、さらに分水嶺を越えて十二社池跡へと向かう。

【道順】

JR 恵比寿駅→渋谷川渋谷橋から宝泉寺几号水準点へ→渋谷川・いもり川入り口→いもり川跡「いもり階段」→南青山7丁目几号水準点から常陸宮邸→氷川神社、金王八幡宮を経て渋谷駅へ→渋谷川・宇田川分流→スペイン坂・オルガン坂→国木田独歩住居跡あたり（→鍋島松濤公園）→宇田川緑道から代々木公園→宇田川・河骨川（春の小川）分流から「春の小川碑」→春の小川→春の小川の最上流、そして高野辰之邸跡へ→十二社通り燈籠→十二社通り、十二社池跡へ→熊野神社を参拝して JR 新宿駅へ

ルートマップ (いもり川から渋谷)



ルートマップ（渋谷から春の小川、十二社）

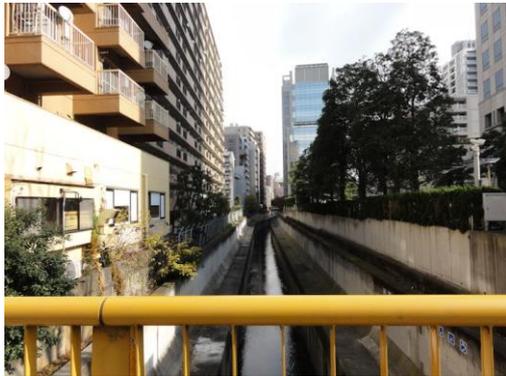


【街歩き解説】

① 恵比寿駅、渋谷川渋谷橋から宝泉寺几号水準点へ

恵比寿駅から、渋谷川に沿って下り、その支流のいもり川へと向かう。

渋谷橋下の渋谷川は、コンクリートに固められて情緒はない。ここから宝泉寺へと向かい几号水準点を見る。几号水準点は、明治期都内に約 150 点が設置され、そのうち約 30 か所が現存している。宝泉寺のそれは、過去には門前にあったと思われる常磐薬師堂の石碑下部にある。



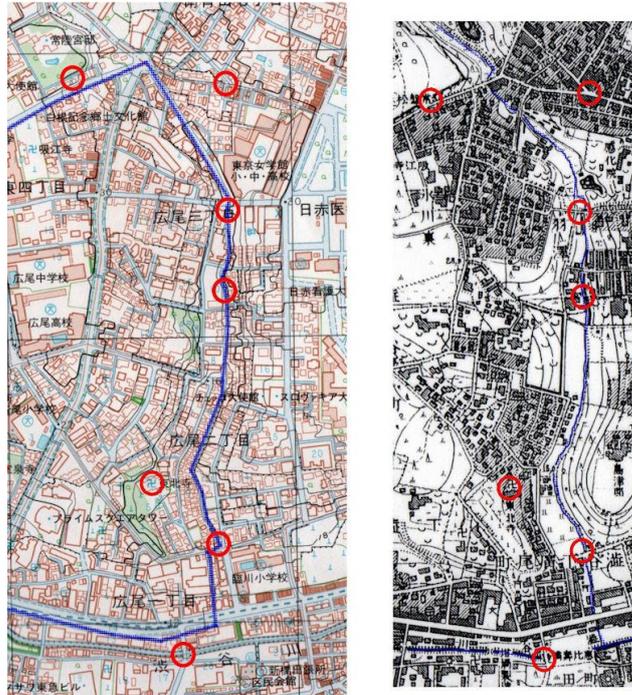
渋谷橋から渋谷川 / 宝泉寺几号水準点

② 渋谷川・いもり川入り口

渋谷川にもどる。恵比寿橋下の渋谷川も、両岸がコンクリートで固められている。かつては、渋谷川・いもり川分流地点であったと思われる明治通りの小さな谷（凹み）を探す。そして、明治通りの北にある五差路から、いもり川跡入り口へと進む。



いもり川跡入り口から特徴的な川跡（左の道）へ
その後右にハケ（崖）のある川跡をさらに進む



新旧いもり川（1/10,000 地形図 H11「渋谷・M42「三田」）

③いもり川跡「いもり川階段」

右手（東）にコンクリート擁壁のあるハケ（崖）を見ながら住宅街の中に残るいもり川跡の蛇行道を進む。左右に眼をやれば、谷合いに発達した街らしい短い小路のある風景が、東西の丘上へと足を延ばせば、かつては大きな屋敷が広がっていたことが感じられるだろう。その後、川跡の行き止まりにある、その名も「いもり川階段」を上る。



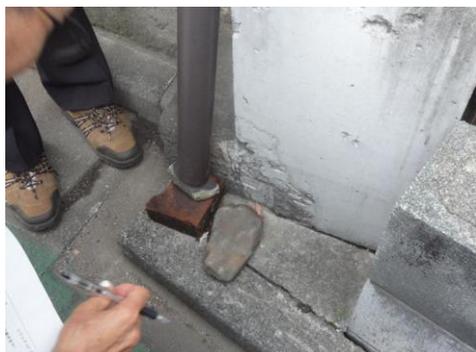
「いもり川階段」手前いもり川跡 / その名も「いもり川階段」

④南青山7丁目几号水準点から常陸宮邸

「いもり川階段」の先で、小路が三角形をつくる蛇行跡があるから、地図を参照して裏通りを歩いてみる。その先東4丁目交差点からは、大きな通りになっているが、いもり川

はここを北上してまもなく水源となっていた。交差点から東へ出て、南青山7丁目東京女学館の北（スロベニア大使館西）にある三叉路へと向かう。このポストの下に几号水準点がある。地面にめり込むような位置にあって、少々探しがいがある。

もともどって、警備の者が立つ常陸宮邸南の道路を西へと進む。旧常磐町のいわれになった常盤松の存在を示す碑が残る。ここにはかつて、薩摩藩の下屋敷があって鹿児島から江戸に来た天璋院（篤姫）が、ここから将軍家へ輿入れした。この土地は、のちに黒田清隆から宮内庁へと移った。



南青山7丁目几号水準点 / (森の奥にある) 常陸宮邸



いもり川の源流（農業大学とあるところ）と
常盤松とある現常陸宮邸あたり

⑤氷川神社、金王八幡宮を経て渋谷駅へ

ここまでずっと上ってきたが、吸江寺、国学院大学の辺りが分水嶺だから、ここから渋谷へ向けて下りになる。

大学の西には、鬱蒼とした森に囲まれた『江戸七氷川』に数えられる氷川神社がある。同社の境内を抜けて北西へと進み、かつて渋谷氏の居館（渋谷城）があった金王八幡宮へ向かう。ここは他の城跡と同様に、ハケ下には湧水もある台地の先端に位置していたのだが、市街化が進んだことで、そのようすはやや不鮮明だ。

同八幡社は、春日局などの造営だという。坂を下りて渋谷駅南へ向かい、両岸がコンクリートで固められた渋谷川の先端を眺める。同川の地上部は、ここから始まっていて、上流はすべて暗渠になって新宿御苑へと続く。



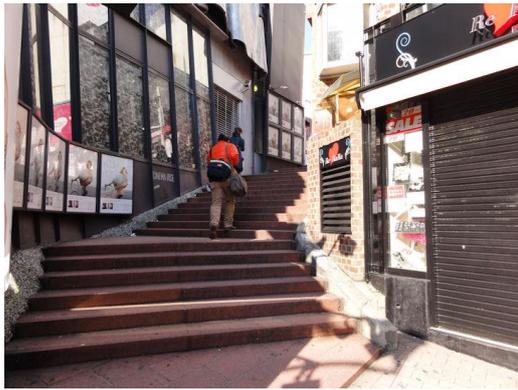
氷川神社 / 金王八幡宮

⑥ 渋谷川・宇田川分流

渋谷川の暗渠は、東急デパートの地下付近で隠田川と宇田川に分流している。宇田川（暗渠）の通過地点は、地下街や地下駅などの構造物分断が証明することを案内地図などで確認する。そして、宇田川の暗渠が通る宇田川通りへと進む。



宇田川通り



スペイン坂・オルガン坂

⑦スペイン坂・オルガン坂

渋谷川・宇田川から少し離れて寄り道をする。

南欧風の街づくりも感じられる石段道の両側には、雑貨店・衣料品店・飲食店などがあるスペイン坂、周辺に音楽関係の店が多かったからつけられたというオルガン坂を上る。その先のNHKの南は、二・二六事件関係者が処刑死した東京陸軍刑務所の跡地であって、同慰霊碑が建つ。



二・二六事件慰霊碑 / 国木田独歩住居跡

⑧国木田独歩住居跡あたり

二・二六事件慰霊碑を西へ進むと、田山花袋（「丘の上の家」）が国木田独歩宅を訪ねた時「野川のうねうねと田圃の中を流れているのが見え、その此方の下流には、水車がかかって頻りに動いているのが見えた」と書いている国木田独歩住居跡の案内碑がある。近くのビルの陰にあるポケットパークから見下せば、当時田んぼがあったという宇田川はずっと下の方であることがわかる。



宇田川緑道（遊歩道入口） / 徳川好敏大尉と日野熊蔵大尉の像

⑨宇田川緑道から代々木公園

国木田独歩住居跡から左へと坂を下りた宇田川跡は、緑道公園になっているので、容易に川跡をたどることができる。

その後は井の頭通りを越えた右手（東）に代々木公園を見るように進む。

公園に寄り道をすれば、園内には日本航空発祥の地碑が残る。鳥の形にデザインされた石碑、その前方には徳川好敏大尉と日野熊蔵大尉の像が建っている。1910年（明治43年）12月19日、当時代々木練兵場だったこの地で、徳川陸軍大尉はアンリ・フォルマン式複葉機を操縦して4分間、距離3,000m、高度70mの飛行に成功したのだという。写真測量のことで、わずかに地図測量との関わりもある。



宇田川を終えて、河骨川（春の小川）へ / 「春の小川碑」の先へ

⑩宇田川・河骨川（春の小川）分流から「春の小川碑」

井の頭通りを横断した先が、宇田川と河骨川（春の小川）分流地点である。宇田川は、ここから小路になって小田急線代々木八幡駅方向へ、河骨川（春の小川）は北進するから、住宅地の中の道をあたかも蛇行するようにして春の小川跡を進む。すぐに、道は小田急の線路沿いになり、小公園の脇を通過する。

公園（「代々木小公園」）の北に、文部省小学校唱歌教科書編纂委員として「春の小川」の小学唱歌への掲載に関わった高野辰之が、河骨川の川辺を散策したとする「春の小川碑」が立つ。

⑪春の小川

その後の春の小川は、しばらくの間小田急線に沿って北上、参宮橋の手前で小田急線を渡る。この辺りから、電柱などに春の小川を示す案内看板が連なる。川跡すなわち低地は、庶民の住宅地となって、銭湯もあったのだが煙突が残るだけで廃業している。

川跡は、しだいに曖昧になるが、東西に離れて高低を見れば谷底は明らかになる。



「春の小川」とある通り / 春の小川水源

⑫春の小川の最上流、そして高野辰之邸跡へ

等高線だけをたよりに山手通り方向へと向かって、春の小川の最上流部を探してみる。それらしき小路もあるが、痕跡は認められない。よく見渡すと刀剣博物館の先で電柱に「春の小川水源」と書かれた看板を発見できるが痕跡は何もないから、地形（最低所）を見て「この辺りだろう」と判断する。

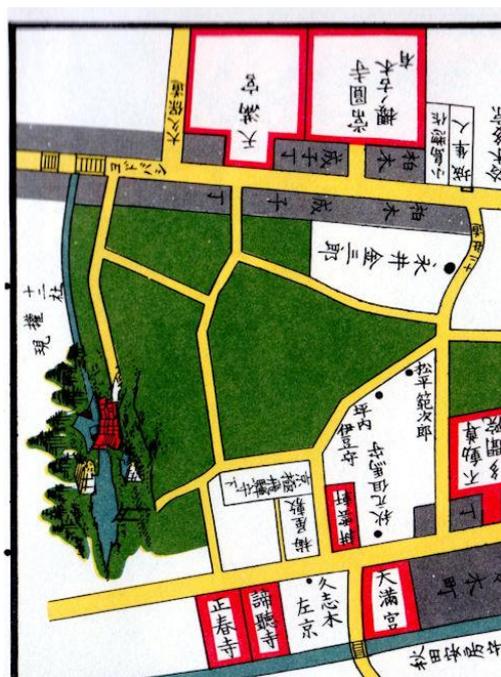
その後、山手通りの東へ出て、高野辰之邸跡の碑が立つ通りへと向かう（渋谷区代々木3-3）。近くには、「高野」の表札や「タカノ」のビル名も発見できるだろう。



高野辰之邸跡 / 十二社の燈籠

⑬十二社通り燈籠

ここから先は、十二社の参道を示す燈籠が立つ十二社通り（山手通り）を北へ進み、玉川上水跡を横断する。玉川上水跡の地下は京王電鉄が走り、地上の一部は緑道公園になっている。下りが始まり、（ここから北は）神田川の流域になる。玉川上水が配水を考えて尾根に建設されていたことが実感できる。



十二社池辺り（江戸切絵図） / 十二社池

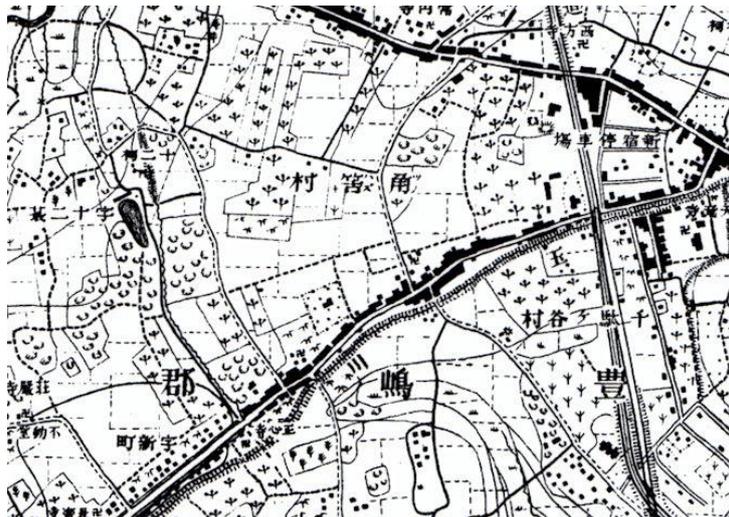
⑭十二社通り、十二社池跡へ

十二社通りの坂を、十二社池の上というバス停付近まで下る。裏通りに福助という蕎麦屋があり、この蕎麦屋の脇には銀杏の巨木が残っている。かつてはこの蕎麦屋の裏側までが大池であったという。この十二社通りの西小路は、かつての江戸の遊興の地の趣のある建物や通りが少し残る。

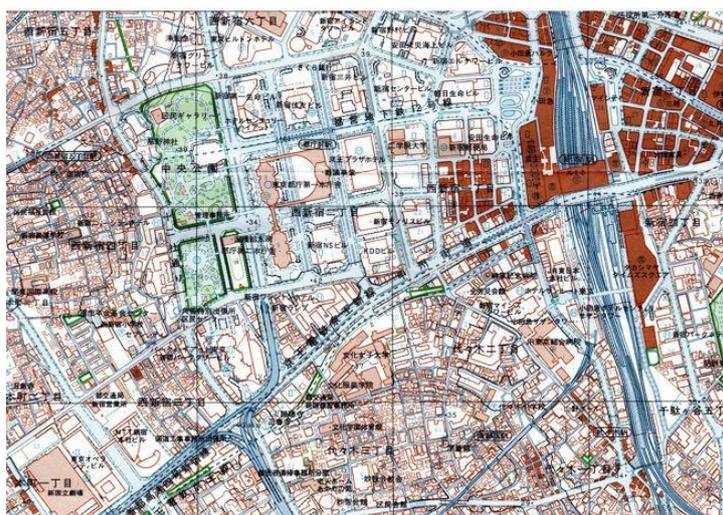
さらに西へ上って（池があった方向を）見下ろすと、遊興の地であったことが建物などから、池があったことが地形から少し感じられる。



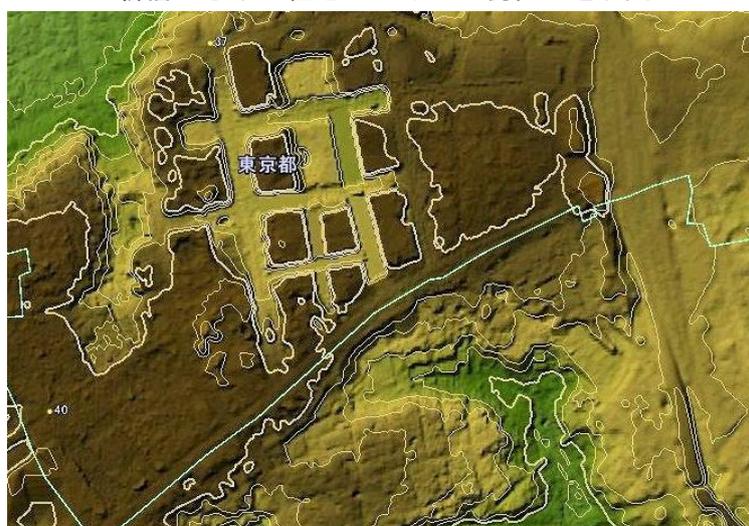
かつての面影を残す十二社池跡の西坂上から
そして十二社池跡へ向かう山手通り西の小路



新宿から十二社池にかけての地形図



新宿から十二社池にかけての現在の地形図



デジタル標高地形図

十二社池跡の凹地が明瞭に残る（左中央）

⑮熊野神社を参拝して JR 新宿駅へ

十二社池跡からは、山手通りを渡ったところにある熊野神社へ。同社は、紀州和歌山から熊野権現を移し祀ったといい、通称「十二社」と呼ばれる。ここには大田南畝の水鉢が残る。その後、新宿中央公園内の散策道を抜けて新宿駅を目指す。長い道歩きは、副都心を抜けたともうすぐ終わる。



熊野神社



蕎麦屋福助のビルに挟まれた銀杏の巨木
春の小川の源流手前にあった玄関前に根を張る巨木

地図豆知識 春の小川と高野辰之

高野辰之は、東京府豊多摩郡代々幡村の現在の代々木3丁目に住まいしていた。一帯は一面の田園地帯であり、そこに宇田川の支流のひとつである河骨川が流れていた。高野はこの川に親しみ、「春の小川」のモデルになったのではないかとされている。

一般には小学唱歌の作詞者として知られる高野辰之(187-1947)は、長野県上水内郡豊田村(現中野市)生まれの国文学者で、1910年東京音楽学校(現、東京芸術大学音楽学部)教授となる。文献資料を収集・考証し、邦楽、歌謡、演劇の史的研究の先駆者として知られる。のち大正大学教授に就任し、晩年は故郷の野沢温泉村の別荘で過ごした。

高野の作詞作品には「春の小川」のほか、幼少を過ごした信州の自然を詠った「故郷」「おぼろ月夜」「紅葉」「春がきた」などがある。いずれも今でも多くの人に親しまれている郷愁を誘う作品である。郷里の豊田村には、「故郷」の記念碑・高野辰之記念館が、野沢温泉村には、「朧月夜」歌碑が建てられていて「高野辰之記念 おぼろ月夜の館」という名前の記念館がある。

ただし、1912年に発表された文部省唱歌「春の小川」は、高野辰之作詞、岡野貞一作曲といわれるが(「高野辰之記念館」

<http://www.city.nakano.nagano.jp/tatsuyuki/index.htm> など)、文部省小学校唱歌教

科書編纂委員として小学唱歌への掲載に関わっただけという考え方もある（「高野辰之記念 おぼろ月夜の館」<http://www.dia.janis.or.jp/~hanzan/takano2.html> など）。

地図豆知識：川跡探しの極意（再掲）

過去の風景を現地でたどるには、河川跡歩きに限らず事前の準備が必須である。そのためには資料収集が必要になり、現在の地形図のほかに、開発が今ほど進んでいない過去の地形図、同空中写真などを用意する必要がある。

関東地方を例にして、参考になるものを新しい順に列記すると以下ようになる。

- ・「デジタル標高地形図」（国土地理院）
- ・都市部では、1/10,000 地形図、その他は 1/25,000 地形図（国土地理院）
- ・明治期以降に刊行された「旧版地形図」（国土地理院）
- ・1945 年以降に撮影された米軍写真を含めた空中写真（国土地理院）
- ・第一軍管区地域の測量図「二万分一迅速測図（1880～1886）」（国土地理院）
- ・「五千分一東京図（1884）」（国土地理院）
- ・明治期以降に刊行された「民間地図」
- ・「江戸切絵図」（人文社などの復刻版）

- ・「川の地図辞典」（菅原健二著 之潮）
- ・「江戸名所図会」（斎藤幸雄著 角川書店）
- ・「遊歴雑記初編」（十方庵敬順著 東洋文庫）その他興味内容に応じて。

概略のルートは参考書「川の地図辞典」で、更にはデジタル標高データ（地形図）で明らかになる。さらに詳細に知るには、単色の旧地形図上で河川を読み彩色する。あるいは、現地地形図の等高線をたどって谷を見つける。そして、必要に応じてお絵かきソフトなどを新旧のデータを重ね合わせると、その詳細が明らかになるだろう。

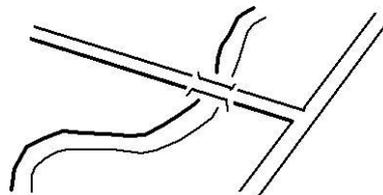
いずれの場面でもデジタルデータを利用することで作業は楽になるが、紙地図を使用した方が等高線の知識が格段に向上するだろう。

さて、下準備をしてから街歩きに出かけるのだが、そのためには、現在の地図上のこの辺りが河跡だろうという予測を立てる必要がある。そのためには地図を読む力が必要になる。現地においても、おなじような読みが必要になる。川跡はしばしば新旧の行政の界になるし、緑道、空き地、曲線を描く細道となることもある。もちろんのこと、現地では川縁の石積み、川へ下りる石段、欄干・橋柱などが小さく残ることもあり、川跡の道には建物が背を向けるだろうから、こうした知識の下で、いい意味での予断をもって探し歩く必要もある。



旧版地形図での河川の表現 1

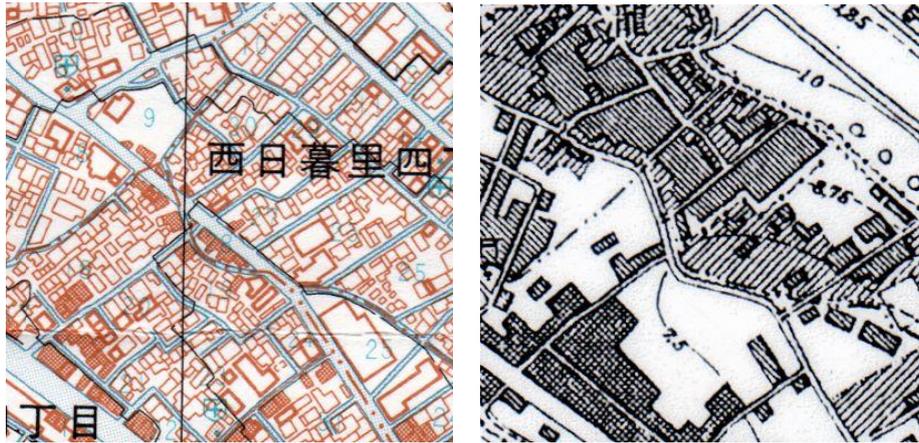
旧版地形図での1条線であらわす河川は「解糸状」に表現されている。また、自然河川は、必ず等高線の凸部（最尖端）を通過する。（1/10,000 地形図 「王子」M42 測量T5 修正）



旧版地形図での河川の表現 2

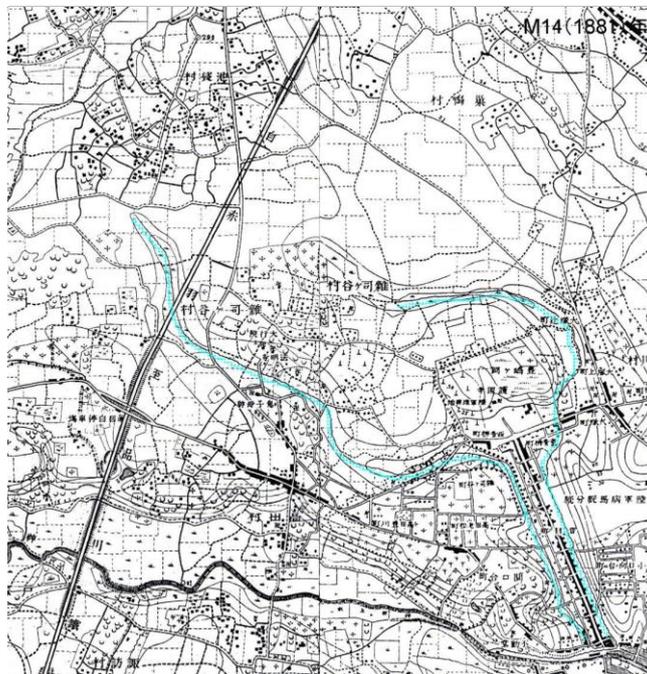
影の付き具合に注目するとわかるが、旧版地形図での2条線であらわす河川（下中央）は北西に光源があるとして凹みがあるものに対する影を付けて表現される。道路（上中央）は、その区分にもよるが凸があるとして表現される。

1条線であらわす河川は、もちろん「解糸状」になっている。（1/25,000 地形図「東京首部」T5 測量）



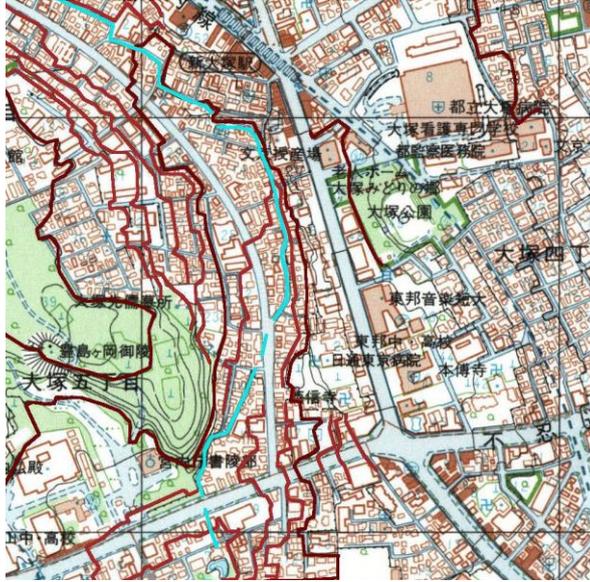
行政の界や道路の不自然な形から河川跡を予想する

現在の地形図（左）にある行政の界や道路の不自然な形から、河川跡が予想できるだろう。はたして、旧版地形図（右）を参照すると現行政界の一部は、後述する墨引きの跡、あるいは（小さな橋の表現などから）河川跡とこれに沿った道路跡であることが明らかになる。（1/10,000 地形図「池袋」H5 修正と「王子」T5 修正）



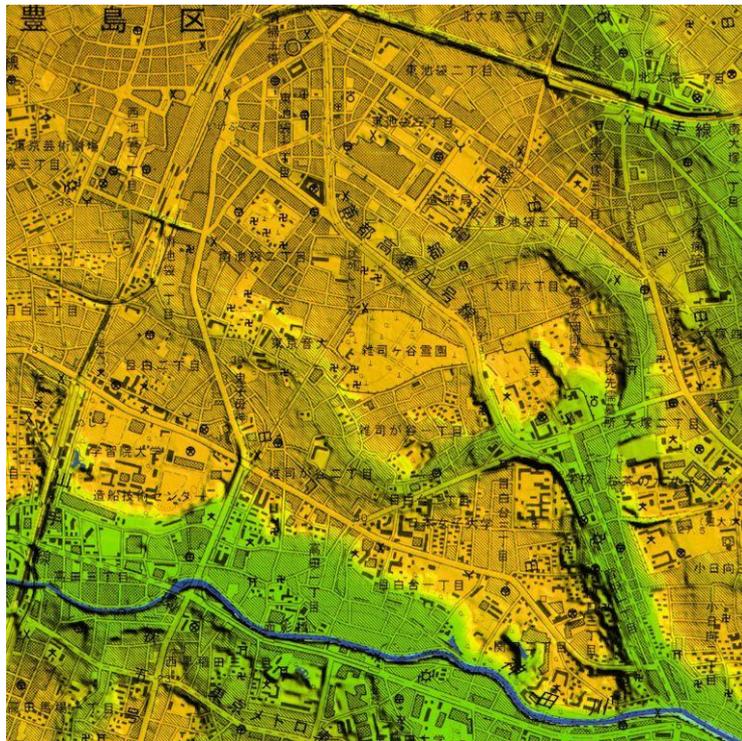
旧版地形図から旧河川を予想する

旧版地形図の解系状になったが画線（河川＝その下辺などを水色に彩色）をたどれば、弦巻川が見えてくる。（1/20,000 地形図「板橋駅」「下谷区」M14 年測量）



現地地形図から旧河川

等高線と道路の形状から谷を見つけて追跡することもできるが？ かなりの地図知識がないとやや難しい。(1/10,000 地形図「池袋」に加筆)



「デジタル標高地形図」から旧河川

これなら、誰にでもおおよその谷のようすが明らかになる
もちろんのこと、さらに詳細な表現とすることも可能だ

明治7年(1874)に「関八州大三角測量」称して内務省が開始した関東平野の測量は、その後全国展開することになり単に「大三角測量」と改称され地理寮が実施した。

地図豆知識：明治期の三角測量と几号水準点（再掲）

その三角網に大きさを与えるため那須基線測量が実施され、さらに高さを与えるため、明治9年に東京・塩釜間の水準測量が開始され翌年に終了した。塩釜まで実施した理由は、石巻湾開港のため、東京湾との海面高の違いを調査する目的もあったからといわれる。

こした明治初期の測量は、当初工部省に雇われていた英人マクヴィンなどの指導で実施されたことからか、水準点にはイギリスで使用されている「不」状の記号を構造物（石柱、華表（鳥居）、石垣、欄干）に刻んだものが使用された。これが、几号高低測量、几号水準点と呼ばれるものである。

この水準点は、地図作成のために東京府下にも多く設置され、その後、内務省技術者との関連で各地にも設置された。東京府内の高低測量の関連では、（移動したものも含めて）約150点の設置中30点の、東京・塩釜間水準測量の関連では、約130点中50点の現存が、それぞれ確認されている。



（イギリスでの）几号水準測量の方法

+ * * * + オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu + * * * +